福井県埋蔵文化財調査報告　第35集

常 安 王 神 の 森 遺 跡

一般国道417号改良工事に伴う調査

1 9 9 7

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序　　文

常安王神の森遺跡（今立郡池田町常安所在）では、これまでに地元の好事家などによって、各種の土器や石器・金属器が採集されており、各時代にわたる複合遺跡として著名でした。

ところがこの度、当遺跡を通る国道417号の拡幅改良工事に伴い、福井県土木部から発掘調査の委託を受け、平成５年度に当センターが調査を実施しました。ここにその発掘成果がまとまり、報告書を刊行することになりました。

調査の結果、遺構として縄文時代中期の住居跡合わせて７棟、配石遺構４ヶ所などを検出し、遺物として多量の縄文式土器・石器を採集しました。中でも、柄鏡形配石遺構は県内初見であり、多量の縄文式土器は土器編年の上で大きな成果をもたらしました。

この発掘成果が、この地域の歴史や文化の理解や埋蔵文化財の保護と活用につながることを期待したいと思います。

最後になりましたが、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり、多大の御協力・御指導を賜りました関係各位に対し、厚く御礼を申し上げます。

平成９年３月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所　長　　青　木　豊　昭

例　　言

1　本書は国道417号道路改良工事に伴い、平成５年度に発掘調査を実施した常安王神の森遺跡（今立郡池田町常安・月ヶ瀬地係所在）の調査報告書である。

2　調査は福井県土木部今立土木事務所の依頼を受けて、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施、工藤俊樹（主査）と中森敏晴（文化財調査員）が担当した。

3　現地調査は平成５年５月６日から同年９月16日まで実施した。出土遺物の整理作業は平成６年４月１日から平成９年３月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにおいて実施した。

4　本書の執筆・編集は中森と白川　綾（嘱託職員）がおこなった。文責は目次にも記してあるが、分担は以下のとおりである。

　白川　綾　第５章第１・３節、第６章第１節Ⅰ、第７章

　中森敏晴　第１～４章、第５章第２節、第６章第１節Ⅱ・第２節

5　遺跡・遺構の図化は森　由佳（金沢大学学生）が、出土遺物の図化は主に各執筆者がおこなった。挿図作成は主に森がおこなった。

6　遺跡・遺構の写真撮影は工藤が、出土遺物の写真撮影は各執筆者がおこなった。写真図版作成は各執筆者・森・野原大輔（茨城大学学生）がおこなった。

7　出土遺物と調査時に作成した図面・写真は、全て福井県教育庁埋蔵文化財調査センターで一括保管している。自余のものはこれにあたられたい。

8　本書に掲載した遺構図には、株式会社パスコに作成を委託した写真測量図を一部改変して使用したものが含まれる。

9　本書の挿図の縮尺は個々に示してあるが、主なものは以下のとおりである。

　遺構配置図……１／200

　住居跡実測図……１／60

　遺構実測図（炉・配石・埋甕・土坑・ピット）……１／30

　遺構実測全図……１／40

　土器実測図（復元）……１／４

　土器実測図（拓影）……１／３

　石器実測図……１／３

10　水糸レベルの表示は海抜高を示し、方位は磁北（Ｍ．Ｎ．）と真北（Ｔ．Ｎ．）を併用した。

11　本書の遺構挿図中で使用している略号は以下のとおりである。

　平面図　土：土坑（例：土坑１→土１）　Ｐ：ピット（例：ピット１→Ｐ１）

　断面図　Ｐ：土器　Ｓ：石

12　石器・石製品の石材鑑定は、東　洋一氏（福井県立博物館）の指導を得た。

13　本書作成にあたり、次の方々より御指導と御助言を頂いた。

　泉　拓良、木下哲夫、土肥　孝（敬称略五十音順）

14　現地調査には地元の方々の御協力を得た。遺物整理には福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

目　　次

頁

第１章　調査の経過……（中森）1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の経過……1

第２章　遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境　……（中森）5
　第１節　地理的環境……5
　第２節　歴史的環境……6

第３章　調査の概要……（中森）9
　第１節　層序……9
　第２節　遺構の分布……9
　第３節　遺物の出土状況……10

第４章　遺構 ……（中森）11
　　Ⅰ　竪穴住居跡　　Ⅱ　配石　　Ⅲ　埋甕　　Ⅳ　柱列　　Ⅴ　土坑・ピット

第５章　遺物 ……40
　第１節　土器……（白川）40
　第２節　石器・石製品 ……（中森）103
　第３節　土製品 ……（白川）126

第６章　まとめ ……127
　第１節　遺物 ……（Ⅰ：白川　Ⅱ：中森）127
　　Ⅰ　土器　　Ⅱ　石器
　第２節　遺構・遺跡 ……（中森）131
　　Ⅰ　遺構　　Ⅱ　遺跡

第７章　常安王神の森遺跡出土縄文時代中期後葉～後期初頭土器群の検討……（白川）136
　第１節　はじめに ……136
　第２節　大杉谷式土器の時間的位置づけと検討の前提 ……136
　第３節　第９～13群土器 ……137
　第４節　第14～16群土器 ……143
　第５節　出土状況からの検討 ……144
　第６節　まとめ ……145
　第７節　おわりに ……146

図　版　目　次

			対応挿図
図版第一	遺跡	（１）遺跡近景	－
		（２）調査前発掘区近景	１
図版第二	遺構検出状況	（１）集石検出状況	－
		（２）集石近景	－
		（３）１号住居跡炉・埋甕１	７・25
図版第三	遺構検出状況	（１）２～５号住居跡全景	12～14
		（２）２～５号住居跡全景	12～14
		（３）２号住居跡炉	８
		（４）４号住居跡Ｐ４	11
図版第四	遺構検出状況	（１）６号住居跡	17
		（２）７号住居跡	20
		（３）６号住居跡炉	16
		（４）７号住居跡炉	19
図版第五	遺構検出状況	（１）配石１	21
		（２）配石２	22
		（３）配石３	24
		（４）配石４	23
図版第六	遺構検出状況	（１）１号住居跡炉・埋甕１	25
		（２）埋甕１断面	26
		（３）埋甕２	25・26
		（４）埋甕３	25・26
図版第七	出土遺物		51
図版第八	出土遺物		53・57
図版第九	出土遺物		59
図版第十	出土遺物		59～61
図版第十一	出土遺物		65・66
図版第十二	出土遺物		66・67
図版第十三	出土遺物		67～69
図版第十四	出土遺物		68・72・74
図版第十五	出土遺物		74・76
図版第十六	出土遺物	（１）包含層出土土器	45
		（２）包含層出土土器	46
図版第十七	出土遺物	（１）包含層出土土器	47
		（２）包含層出土土器	48
図版第十八	出土遺物	（１）包含層出土土器	49

図版第十八　出土遺物　（２）包含層出土土器……50
図版第十九　出土遺物　（１）１号住居跡出土土器……52
（２）２号住居跡出土土器……54
図版第二十　出土遺物　（１）２号住居跡出土土器……55
（２）２号住居跡出土土器……56
図版第二十一　出土遺物　（１）３号住居跡出土土器……58
（２）４号住居跡出土土器……62
図版第二十二　出土遺物　（１）４号住居跡出土土器……63
（２）４号住居跡出土土器……64
図版第二十三　出土遺物　（１）５号住居跡出土土器……70
（２）５号住居跡出土土器……71
図版第二十四　出土遺物　（１）６号住居跡出土土器……73
（２）７号住居跡出土土器……75
図版第二十五　出土遺物　（１）柱列出土土器……77
（２）柱列・配石・土坑出土土器……78・79
図版第二十六　出土遺物　（１）土坑出土土器……80
（２）ピット出土土器……81
図版第二十七　出土遺物　（１）ピット出土土器……82
（２）土製品……94
図版第二十八　出土遺物　（１）打製石斧……84・85
（２）打製石斧……84・85
図版第二十九　出土遺物　（１）磨石類……86
（２）磨石類……87
図版第三十　出土遺物　（１）磨石類……88
（２）磨石類……89
図版第三十一　出土遺物　（１）石皿類……90
（２）石皿類……91
図版第三十二　出土遺物　（１）石錘……92
（２）磨製石斧……83
（３）石鏃・石製品……93

挿　図　目　次

頁

第１図　常安王神の森遺跡調査区グリッド配置図……２
第２図　福井県地勢図……５
第３図　常安周辺の地形模式図……６
第４図　池田町内縄文時代遺跡分布図……７

第５図　北調査区北壁土層柱状模式図……９
第６図　常安王神の森遺跡遺構図……10－11
第７図　１号住居跡炉実測図……11
第８図　２号住居跡炉実測図……11
第９図　３号住居跡Ｐ１実測図……12
第10図　３号住居跡Ｐ８実測図……12
第11図　４号住居跡Ｐ５実測図……12
第12図　２～５号住居跡実測図（１）……12－13
第13図　２～５号住居跡実測図（２）……13
第14図　２～５号住居跡区割図……14
第15図　５号住居跡Ｐ６実測図……15
第16図　６号住居跡炉実測図……15
第17図　６号住居跡実測図……15
第18図　６号住居跡Ｐ１・２実測図……16
第19図　７号住居跡炉実測図……16
第20図　７号住居跡実測図……17
第21図　配石１実測図……18
第22図　配石２実測図……19
第23図　配石４実測図……20
第24図　配石３実測図……20－21
第25図　１号住居跡炉・埋甕１～３実測図……21
第26図　埋甕１～３実測図……21
第27図　土坑80・82、Ｐ358～361実測図……22
第28図　柱列実測図……23
第29図　遺構実測図（１）……24
第30図　遺構実測図（２）……25
第31図　遺構実測図（３）……26
第32図　遺構実測図（４）……27
第33図　遺構実測図（５）……28
第34図　遺構実測図（６）……29
第35図　遺構実測図（７）……30
第36図　遺構実測図（８）……31
第37図　遺構実測図（９）……32
第38図　遺構実測図（10）……33
第39図　遺構実測図（11）……34
第40図　遺構実測図（12）……35
第41図　遺構実測図（13）……36

第42図　遺構実測図（14）……37
第43図　遺構実測図（15）……38
第44図　遺構実測図（16）……39
第45図　包含層出土土器実測図（１）……44
第46図　包含層出土土器実測図（２）……45
第47図　包含層出土土器実測図（３）……47
第48図　包含層出土土器実測図（４）……48
第49図　包含層出土土器実測図（５）……49
第50図　包含層出土土器実測図（６）……50
第51図　１号住居跡出土土器実測図（１）……52
第52図　１号住居跡出土土器実測図（２）……53
第53図　２号住居跡出土土器実測図（１）……55
第54図　２号住居跡出土土器実測図（２）……56
第55図　２号住居跡出土土器実測図（３）……57
第56図　２号住居跡出土土器実測図（４）……58
第57図　３号住居跡出土土器実測図（１）……59
第58図　３号住居跡出土土器実測図（２）……60
第59図　４号住居跡出土土器実測図（１）……63
第60図　４号住居跡出土土器実測図（２）……64
第61図　４号住居跡出土土器実測図（３）……65
第62図　４号住居跡出土土器実測図（４）……66
第63図　４号住居跡出土土器実測図（５）……67
第64図　４号住居跡出土土器実測図（６）……68
第65図　５号住居跡出土土器実測図（１）……70
第66図　５号住居跡出土土器実測図（２）……71
第67図　５号住居跡出土土器実測図（３）……72
第68図　５号住居跡出土土器実測図（４）……74
第69図　５号住居跡出土土器実測図（５）……75
第70図　５号住居跡出土土器実測図（６）……76
第71図　５号住居跡出土土器実測図（７）……77
第72図　６号住居跡出土土器実測図（１）……79
第73図　６号住居跡出土土器実測図（２）……80
第74図　７号住居跡出土土器実測図（１）……81
第75図　７号住居跡出土土器実測図（２）……82
第76図　柱列・埋甕・ピット出土土器実測図……83
第77図　柱列出土土器実測図……85
第78図　柱列・配石出土土器実測図……87

第79図　土坑出土土器実測図（１）……89
第80図　土坑出土土器実測図（２）……90
第81図　ピット出土土器実測図（１）……92
第82図　ピット出土土器実測図（２）……95
第83図　磨製石斧実測図 ……103
第84図　打製石斧実測図（１） ……105
第85図　打製石斧実測図（２） ……106
第86図　磨石類実測図（１） ……109
第87図　磨石類実測図（２） ……110
第88図　磨石類実測図（３） ……111
第89図　磨石類実測図（４） ……112
第90図　石皿類実測図（１） ……120
第91図　石皿類実測図（２） ……121
第92図　石錘実測図 ……123
第93図　石鏃・石製品実測図 ……124
第94図　土製品実測図 ……126
第95図　石器類（磨製石斧・打製石斧・磨石類・石皿類・石錘）分布図 ……128
第96図　中期後葉～中期末の各土器群 ……139
第97図　参考資料 ……141
第98図　有文系深鉢形土器の系統 ……142
第99図　時期別概念図 ……144
第100図　段階変遷図 ……144－145

表　目　次

頁

第１表　池田町内縄文時代遺跡一覧表……８
第２表　掲載土器出土区一覧表……96
第３表　磨製石斧観察一覧表 ……103
第４表　打製石斧観察一覧表 ……107
第５表　磨石類観察一覧表 ……112
第６表　石皿類観察一覧表 ……122
第７表　石錘観察一覧表 ……124
第８表　石鏃観察一覧表 ……125
第９表　土製品観察一覧表 ……126

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

福井県今立郡池田町常安に、「王神の森」と呼ばれる地籍がある。この字名は当地が欽明天皇の皇子、臘嘴鳥皇子[1)]の住居した地である、という伝承に由来している。元々は「皇子の森」と書いたものが、「王子の森」とも書かれ、やがて「オウジ」を「オウジン」と呼ぶようになり、現在の「王神の森」になったと考えられている。また、皇子の死後、その館跡に建立されたと伝えられる日野宮神社は、王神の森とともに古来から信仰の対象とされてきた。

昭和13年（1938年）６月22日、その王神の森地籍を横断する県道月ヶ瀬線の改修工事中、縄文式土器や石器などとともに一面の銅鏡が出土した。当時の日野宮神社宮司、宮本碩氏が京都帝国大学（現、京都大学）の梅原末治博士にこの銅鏡の鑑定を依頼したところ、「伯牙弾琴鏡[2)]」と呼ばれる、奈良時代中期の唐式鏡[3)]であることが判明、件の伝承とも相まって、にわかに衆目を集めるに至った。

それから54年後の平成４年（1992年）７月、福井県今立土木事務所（以下、今立土木）は、遺跡発見の契機となった旧県道月ヶ瀬線、現在の一般国道417号（池田町月ヶ瀬地係）において、道路拡幅工事事業を計画、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、埋文センター）に工事着手に先立つ調査を依頼した。埋文センターは同年８月24・25日に事業予定区域において試掘調査を実施、縄文時代中期後葉の遺構・遺物を確認した。このほか、周辺では奈良時代の遺物の出土も伝えられていたため、本遺跡を縄文時代・奈良時代の複合遺跡と判断、記録保存のための本調査が事前に必要となる旨を今立土木に回答した。

その後、福井県教育庁文化課（以下、文化課）・埋文センター・今立土木の三者で合議した結果、平成５年度に本調査を実施するということで合意に達し、常安王神の森遺跡発掘調査の実施が決定した。

なお、発掘事業計画書など、当時の公文書では本遺跡名は「常安王子の森遺跡」とされているが、「王神の森」が正式な字名であることが後日判明したため、現在は「常安王神の森遺跡」を正式名とする[4)]。したがって、本書でも全て「常安王神の森遺跡」で遺跡名を統一している。

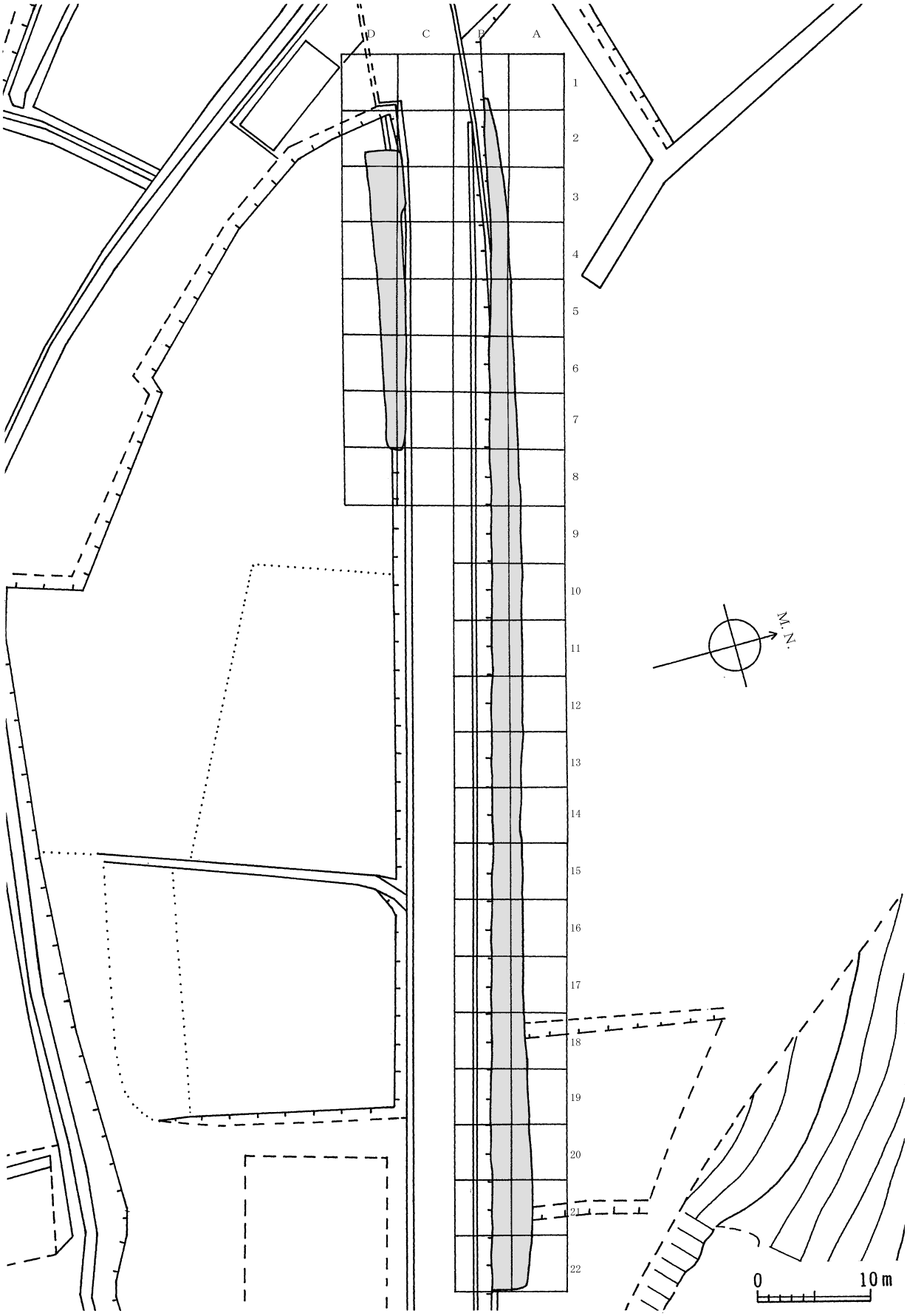
第２節　調査の経過　〔図版第一〕

常安王神の森遺跡現地調査は平成５年（1993年）５月６日より開始した。今回、調査を実施したのは足羽川にほぼ沿って東西に走る国道417号の拡幅部分であり、遺跡の南東最奥部にあたる。

調査区は道路の両側、北側と南側に分かれ、北調査区が幅約1.0～3.5m、長さ約106m、南調査区が幅約1.0～3.0m、長さ約26mと、非常に細長い。グリッド割りは一辺を５mとし、南北にアルファベット（A～D）、東西にアラビア数字（１～22）を付してグリッド名とした（第１図）。

表土部分は事前に重機による排土を行い、その後に人力による発掘調査を実施した。しかし、調査開始から１ヶ月ほど経過すると、予想を上回る多量の遺構・遺物の検出が相次ぐようになり、当初予定の６月末までに発掘調査を完了させることは不可能と判断するに至った。

この事態を受けた文化課・埋文センター・今立土木の三者は、現地調査の期間延長および費用増額について再協議を行った。その結果、当初予定していた調査期間を約２ヶ月（５～６月）から約４ヶ月（５～８月）に延長すること、期間延長に伴って生ずる調査費用の不足分は、平成５年度事業として現地調査後に実施予定であった遺物整理費用の全てと若干の増額をもって補填すること、の二点について



第１図　常安王神の森遺跡調査区グリッド配置図（縮尺１/500）

合意に達した。したがって、遺物整理作業はその内容を再度見直す意味も含めて、平成６年度以降に先送りされることとなった。

こうして、計画変更自体は了承されたものの、遺構・遺物の検出量は日ごとに増すばかりで、それに伴う作業量の増加は貴重な時間を容赦無く削り取っていった。さらには６月半ば頃から延々と続いていた天候不順が、夏期には近年希に見る記録的大冷夏へと繋がるに至って、事態はますます悪化した。必然、残された期間は逼迫し、土曜・日曜も返上した上にしばしば荒天を押して発掘作業を強行した。

その甲斐もあって、８月末までには若干の遺構実測を残して発掘作業のほとんどを済ませ、９月16日には残る作業も全て完了、現地調査を終了した。

以下、発掘調査日誌を抄録する。

４月20日　重機による表土剥ぎ。

５月６日　作業員を入れ、本格的に調査開始。木根を伐採・除去しつつ、包含層を掘削。

５月12日　Ａ・Ｂ６～７区で配石１検出。

５月19日　Ａ・Ｂ11～15区で小礫の密集（集石）を検出。Ａ15区で石組炉跡を検出、１号住居跡炉とする。

５月25日　遺構精査開始。

５月28日　Ｂ８区で配石２検出。

６月７日　Ａ・Ｂ11～15区の集石実測開始。Ａ20区で配石４検出。

－この頃より天候不順が続いたため、土曜も作業日にあて、かつ雨天の日は遺構実測を行う。

６月８日　Ａ・Ｂ18～19区で配石３検出。

６月11日　磨製石斧１点盗まれる。文化庁土肥孝氏来訪、遺跡見学（～12日）。

６月17日　Ｃ・Ｄ７区で集石を伴う土坑（土坑80・82、Ｐ358～361）検出。土器多量に出土。

６月22日　集石実測完了。配石１の大型石皿１点盗まれる。

－この後も盗難が相次ぎ、石棒２点・土器片数点などが盗まれる。

６月25日　今立土木事務所と協議。調査期間延長と予算増額について了承を得る。

Ａ・Ｂ12～13区で２・３号住居跡を検出。

６月26日　２・３号住居跡の調査開始。３号住居跡より石製品出土。

６月28日　２・３号住居跡で焼土を検出、分布状況から２・３号の他にも住居が切り合う可能性が高くなり、４号住居跡を設定する。

６月29日　２号住居跡の床面および壁を決定。床は一面が被熱、赤化している。

７月２日　４号住居跡に切り合う新たな住居を検出、５号住居跡とする。

７月７日　Ａ・Ｂ１～６区およびＣ・Ｄ区２～７区写真撮影。

７月12日　Ａ・Ｂ14～15区で土坑群を検出。

７月17日　Ａ16区で石組炉と床面を検出、６号住居跡とする。

７月20日　６号住居跡の壁溝を検出。Ａ・Ｂ19区で石組炉を伴う住居跡を検出、７号住居跡とする。

７月31日　配石３・４実測完了。

８月５日　地元小学生の遺跡見学会。

８月９日　５号住居跡範囲確定。

８月13日　４号住居跡範囲確定。

８月14日　お盆休み（～16日）

－これ以降は日曜も作業にあてる。

８月18日　１号住居跡炉・埋甕１～３写真撮影・実測開始。

８月20日　１号住居跡炉・埋甕１～３調査完了。

８月26日　配石３調査完了。

８月31日　６号住居跡写真撮影。

９月５日　２～５号住居跡遺物取り上げ。調査区清掃、測量に備える。

９月６日　空中測量。

９月８日　７号住居跡炉実測、完掘。７号住居跡調査完了。

９月12日　２～５号住居跡写真撮影。４号住居跡Ｐ５出土の壷形土器取り上げ。

９月13日　２号住居跡炉・焼土裁ち割り、実測。

９月14日　現場撤収に備え、公用車で不要な器材をセンターへ運搬。

９月15日　通しセクション作図。２号住居跡焼土を全て除去、完掘。

９月16日　通しセクション実測完了。プレハブ等を解体・撤収。

最後に５・６号住居跡付近の北壁面を掘削、大コンテナ１箱分の土器片を採集し、現地調査を終了。

註

１）『日本書紀』には「臘嘴鳥皇子（あとりのみこ）」、『古事記』には「足取王（あとりのおおきみ）」とある。記紀には名前のみが記され、消息が全く不明な皇族が多いが、臘嘴鳥皇子もその一人である。王神の森の由来は記紀と対比しても矛盾点が多く、伝承の域を出るものではないと思える。

２）鏡の背面の文様が、中国春秋時代の琴の名手、伯牙の伝説を表しているところからこの名が付く。王神の森出土の鏡は昭和14年７月13日付で重要美術品に指定、現在は日野宮神社宝物として同社に所蔵されている。「銅質はややわるく、文様表出も鈍く、銘文もほとんどよみがたいほどである。鈕の近くに利器で打込んだ欠損部あり、出土品たるを示している。右辺二ヶ所に穴が穿けられており、後世、御正体として用いられていたことが知れる。同じ文様の鏡は多く、十二面が知られている」（中野1973）。

３）王神の森出土の鏡は、渡来した唐鏡を元に土鋳型を作って複製品を鋳造する、いわゆる踏返（ふみがえし）鋳造という方法で国内生産されたものなので、「唐鏡」ではなく「唐式鏡」となる。

４）今回の調査以前の文献（『福井県史』など）では、「常安遺跡」という遺跡名が一般に用いられていた。

参考文献

池田町史編纂委員会　編　1977　『池田町史』

中野政樹　1973　「奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料および同范鏡の分布とその鋳造技術」『東京国立博物館紀要』第八号

第２章　遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境

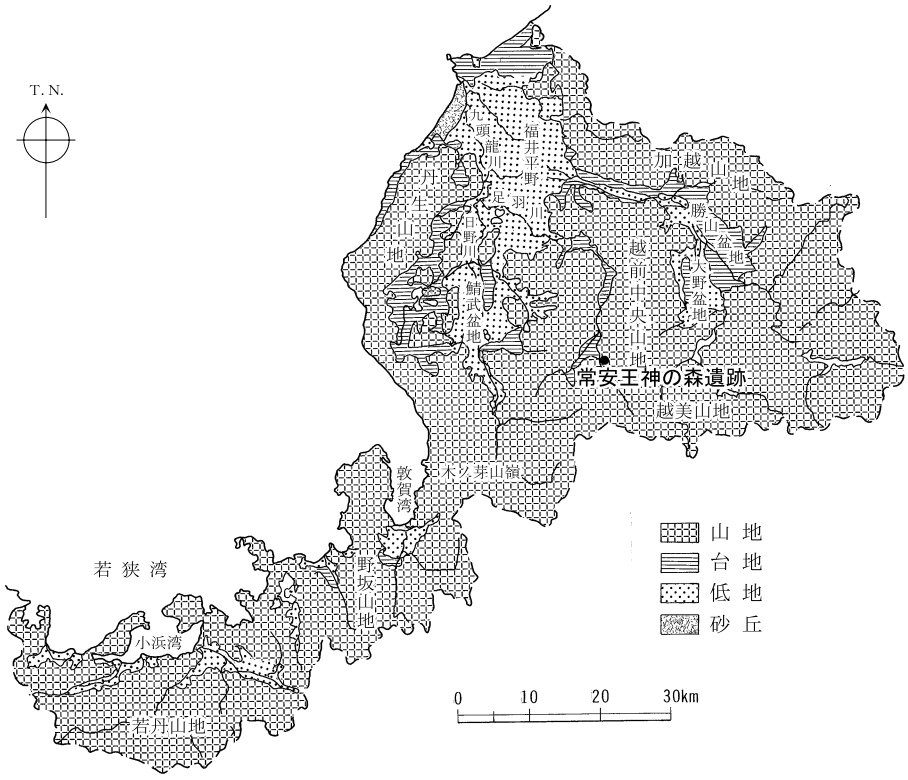
常安王神の森遺跡は、福井県今立郡池田町常安・月ヶ瀬地係に所在する。

本遺跡の所在する足羽川上流域では、これまで多くの遺跡の存在が確認されてきた。ここでは、本遺跡の所在する地域の地理的環境と歴史的環境について記述する。

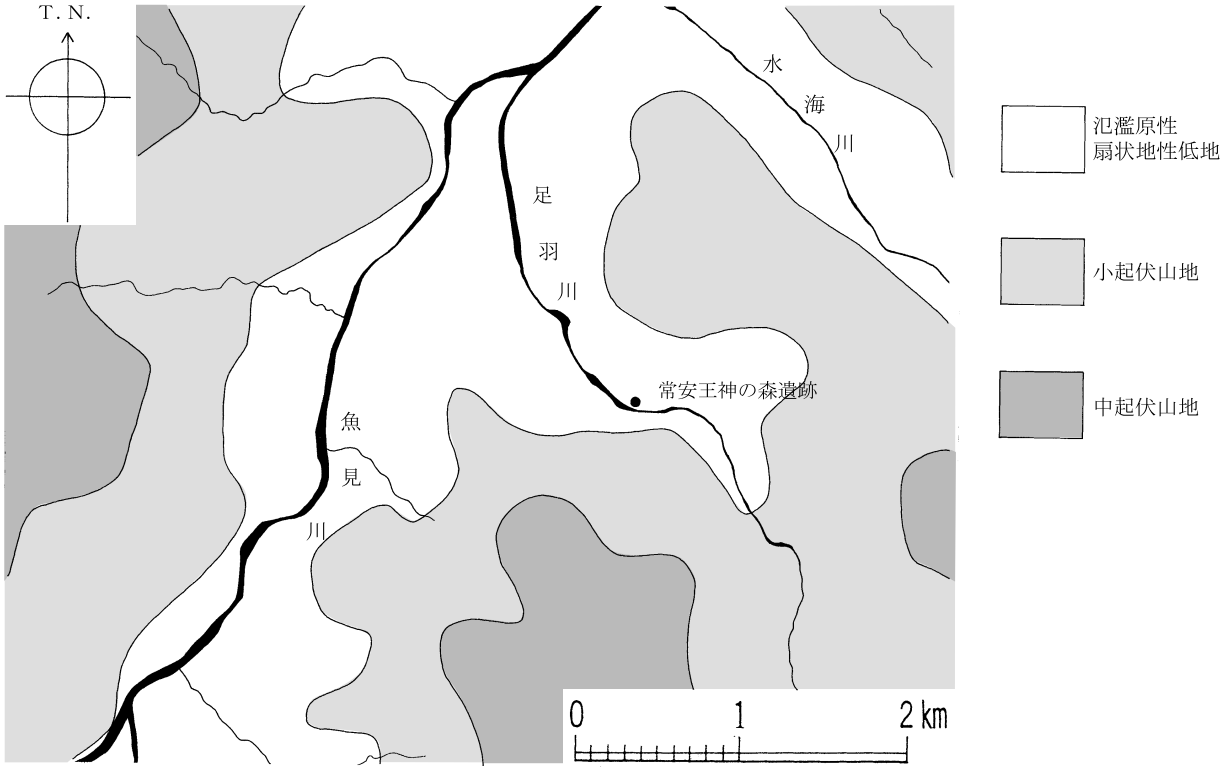
第１節　地理的環境　〔図版第一〕

福井県は、昔の国名で言うと越前・若狭の両国から成っており、本州日本海沿岸のほぼ中央近く、本州が西から次第に北東へ折れ曲がるあたりに位置する。現在では敦賀市の東方、木ノ芽山嶺を境に以北を嶺北、以南を嶺南と呼び、行政的にも大別される。嶺北は山がちで、広く両白山地に属し、昔の越前の国にほぼ相当する（嶺南には旧越前国の敦賀市を含む）。九頭龍川水系が北東から北へ流れ、下流に福井平野を形成し、その周囲を加越山地・越美山地・越前中央山地・丹生山地・南条山地が取り巻いている（第２図）。

池田町は嶺北の南部、越前中央山地の懐深くに位置する山間の町である。町域の約９割以上を森林が占め、谷間には農林業の集落が散在する。南西は南条郡今庄町、西は同郡南条町、北西は武生市・今立郡今立町・鯖江市、北は足羽郡美山町、東は大野市、南は岐阜県揖斐郡徳山村に接する。南方には越美山地がそびえ、冠　山（1,256.6m）、金草岳（1,227m）をはじめとする標高1,000m級の山々を岐阜県境に連ねている。冠山を源流とする足羽川は、池田町を縦貫する最大の河川で、越前中央山地に谷を刻む魚見川・水海川・部子川を集め、月ヶ瀬付近で典型的な扇状地を形成しつつ盆地へ流入、美山町へ向かって北流している。



第２図　福井県地勢図（縮尺１/1,000,000）



第３図　常安周辺の地形模式図（縮尺１/50,000）

常安王神の森遺跡の位置する常安・月ヶ瀬地係は足羽川上流の扇状地上にある。また、本遺跡の展開する糀谷山（こうじたにやま）西縁部の緩斜面はその外周が足羽川によって浸食され、比高差約５ｍの河岸段丘地形ともなっている。つまり、本遺跡は糀谷山西麓・足羽川右岸の河岸段丘上に展開した集落遺跡である、と言えよう（第３図）。

遺跡の現況はほとんどが水田で、その規模は北西・南東方向に600ｍ、北東・南西方向に250ｍを有し、総面積は約107,000㎡に及ぶ。

第２節　歴史的環境

（１）池田町内の縄文遺跡

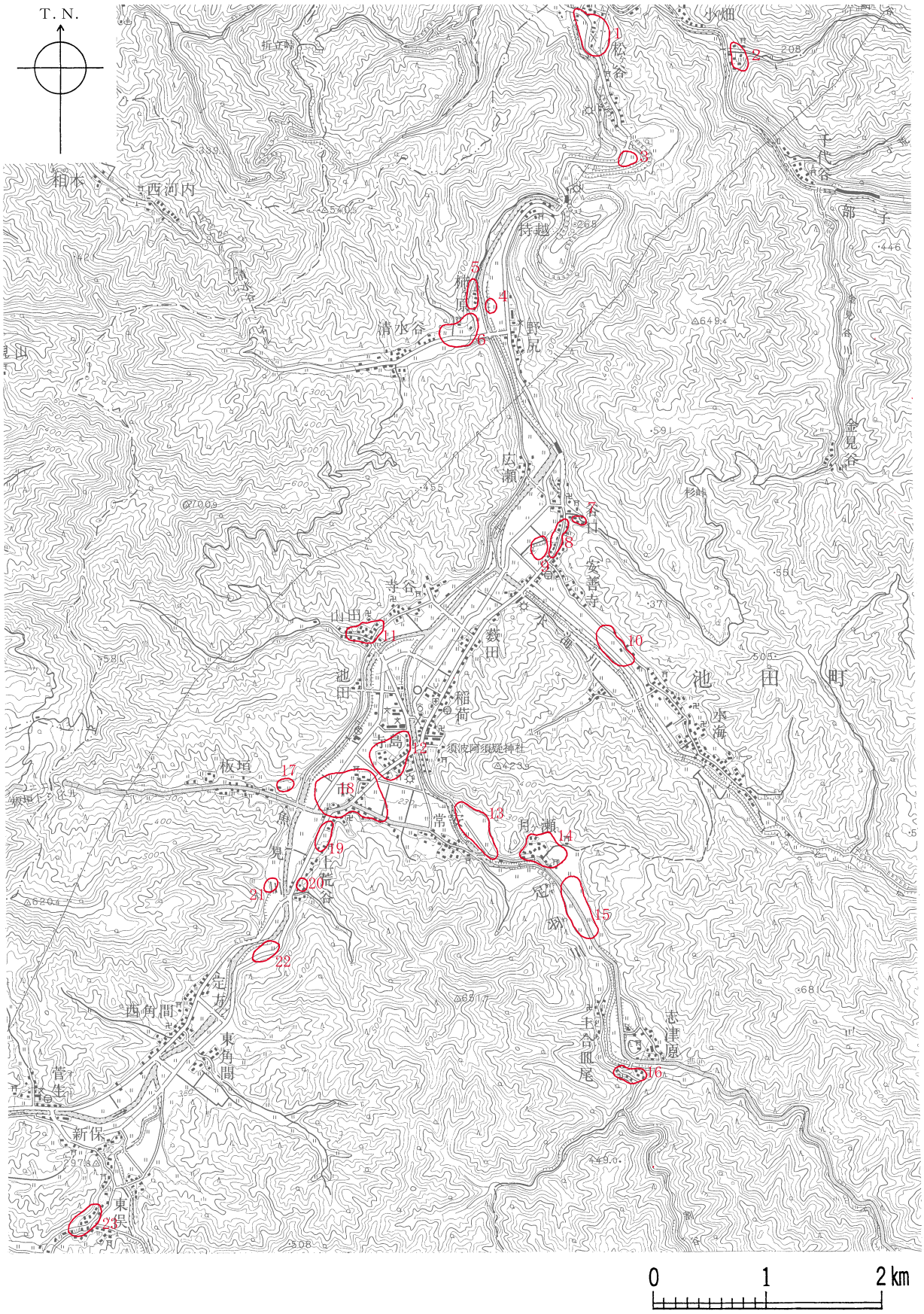
池田町内には本遺跡も含め、様々な遺跡が存在するが、いずれも工事等によって偶発的に発見された事例が多く、今日まで調査例もほとんど無い。ここでは縄文時代以前の主要な遺跡について解説する。

常安王神の森遺跡（つねやすおうじんもり）　（第４図13）

昭和13年、県道月ヶ瀬線（現、国道417号）改修工事中に発見された。縄文中期後葉の大杉谷（おおすぎだに）式土器や石器等が多量に出土し、同時に奈良中期の唐式鏡が出土したことでも知られる。また、在地土器型式として一時期取り上げられた、常安式土器のタイプサイトでもある。今回の調査は町内でも初の本格的遺跡発掘調査となった。

上野（うわの）遺跡　（第４図９）

水海川と足羽川の合流点に向かって東部の山地からせり出した台地上に立地する。昭和50年８～９月に池田町教育委員会が実施した試掘調査では、平安時代の掘立柱建物が確認されたが、当該時期の遺物の出土は少なく、縄文時代の遺物が多く得られている。当遺跡に縄文時代の集落が展開している可能性は高いが、未だ確認はされていない。



第４図　池田町内縄文時代遺跡分布図（縮尺１/50,000）

第１表　池田町内縄文時代遺跡一覧表

	遺　跡　名	所在地	種別	時　　代	現　況	遺　跡　概　況	備　　考
1	松ヶ谷剣社遺跡	松ヶ谷	散布地	縄文・中世・近世	水田・宅地	縄文土器片、石器類（石皿・敲石など）	
2	上小畑上村遺跡	上小畑	散布地	縄文・中世・近世	宅地・畑地		
3	松ヶ谷火端遺跡	松ヶ谷	散布地	縄文	水田		
4	清水谷八反田遺跡	清水谷	散布地	縄文～古墳・近世	水田		
5	柿ヶ原寅ノ尾遺跡	柿ヶ原	散布地	縄文・中世・近世	宅地・水田		
6	清水谷大門遺跡	清水谷	散布地	縄文・奈良～近世	水田		
7	谷口堀田遺跡	谷口	散布地	縄文・中世・近世	宅地		
8	谷口木戸口遺跡	谷口	散布地	縄文・古墳・中世・近世	宅地		
9	上野遺跡	谷口	散布地	縄文・奈良・平安	水田	平安期の建物跡、縄文期の遺物	1975年町教委調査
10	水海柿ヶ町遺跡	水海	散布地	縄文・近世	水田		
11	山田大門畑遺跡	山田	散布地	縄文～近世	宅地・畑地		
12	寺島縄手遺跡	寺島	散布地	縄文・奈良～近世	宅地・水田		
13	常安王神の森遺跡	常安	散布地	縄文・奈良・平安・近世	水田・山林		1993年県埋文センター調査
14	月ヶ瀬中出遺跡	月ヶ瀬	散布地	縄文・近世	宅地・水田		
15	月ヶ瀬硝子遺跡	月ヶ瀬	散布地	縄文・奈良・平安	水田		
16	土合皿尾南勝遺跡	土合皿尾	散布地	縄文	宅地・水田		
17	板垣芝原遺跡	板垣	散布地	縄文・奈良～近世	水田		
18	市姫遺跡	市	散布地	縄文・奈良・平安・中世・近世	宅地・水田	縄文土器片など	
19	上荒谷大畑遺跡	上荒谷	散布地	縄文・平安・近世	水田		
20	上荒谷谷出遺跡	上荒谷	散布地	縄文・奈良～近世	宅地		
21	上荒谷塚畑遺跡	上荒谷	散布地	縄文～古墳	水田		
22	上荒谷西之上遺跡	上荒谷	散布地	縄文～古墳・中世・近世	水田		
23	東俣坊谷口遺跡	東俣	散布地	縄文・中世・近世	宅地・水田		

この他、**松ヶ谷剣社遺跡**（第４図１）、**上小畑上村遺跡**（同図２）、**松ヶ谷火端遺跡**（同図３）、**清水谷八反田遺跡**（同図４）、**柿ヶ原寅ノ尾遺跡**（同図５）、**清水谷大門遺跡**（同図６）、**谷口堀田遺跡**（同図７）、**谷口木戸口遺跡**（同図８）、**水海柿ヶ町遺跡**（同図10）、**山田大門畑遺跡**（同図11）、**寺島縄手遺跡**（同図12）、**月ヶ瀬中出遺跡**（同図14）、**月ヶ瀬硝子遺跡**（同図15）、**土合皿尾南勝遺跡**（同図16）、**板垣芝原遺跡**（同図17）、**市姫遺跡**（同図18）、**上荒谷大畑遺跡**（同図19）、**上荒谷谷出遺跡**（同図20）、**上荒谷塚畑遺跡**（同図21）、**上荒谷西之上遺跡**（同図22）、**東俣坊谷口遺跡**（同図23）などがあるが、いずれも散布地である。

参考文献

青野壽郎・尾留川正平　責任編集　1970　『日本地誌　第10巻　富山県・石川県・福井県』　日本地誌研究所　二宮書店

池田町史編纂委員会　編　1977　『池田町史』

小葉田淳　監修　1981　『福井県の地名』　日本歴史地名体系　第18巻　平凡社

河原純之・島田正彦・隼田嘉彦・松浦義則　責任編集　1989　『角川日本地名大辞典　18　福井県』　角川書店

福井県教育委員会　1993　『福井県遺跡地図』

福井県自然環境保全調査研究会　編　1985　『みどりのデータバンク総括報告書』　福井県

第３章　調査の概要

第１節　層序

常安王神の森遺跡は、糀谷山（こうじたにやま）の緩斜面を足羽川（あすわがわ）が浸食した河岸段丘地形上に立地する。昭和13年の工事時に糀谷山の南側斜面はすでに一部切り落とされていたが、北調査区はその斜面をさらに切り落とす形になったため、特に傾斜が急である。標高は、北調査区が233.000～234.600ｍ、南調査区が232.700～233.300ｍと、調査区内でも比高差は最大で２ｍほどある。

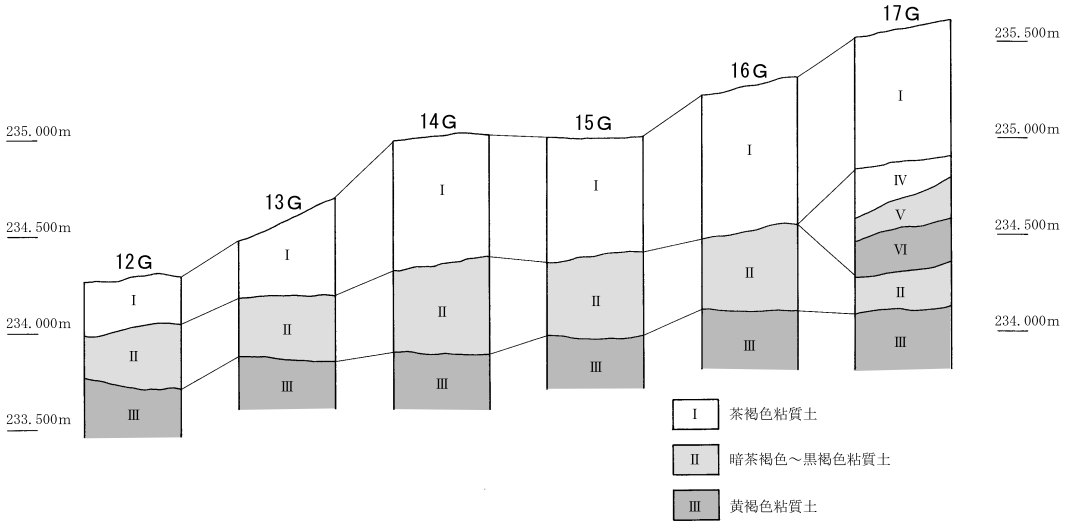
常安王神の森遺跡の標準層序は、おおむね以下のように大別出来る（第５図）。

Ⅰ層　茶褐色粘質土で構成される表土層。小角礫を多く含む。土質は粘性がやや強く、しまりがやや弱い。上部０～20㎝ほどは腐葉土で、小礫の混入はやや少ない。厚さは20～80㎝ほどになる。

Ⅱ層　暗茶褐色ないし黒褐色粘質土で構成される遺物包含層。部分的に小礫を多く含むが、そのほとんどは川原石である。厚さは20～50㎝ほどになる。

Ⅲ層　黄褐色粘質土で構成される地山層。

Ⅰ・Ⅱ層は、標高の高い東方へ行くほど堆積が厚くなる傾向にあり、特にⅠ層の堆積が著しい。16区以東になると、Ⅰ・Ⅱ層の間に間層（Ⅳ～Ⅵ層）が入り、全体の厚さは最大で60㎝ほどにもなる。Ⅳ～Ⅵ層は各々Ⅰ～Ⅲ層に対応して土質が似ているが、実際には堆積の随所に土層の混じりや乱れが見受けられることから、おそらくは自然崩壊によって、斜面上方の堆積土が流れ込んで来たものと思える。



第５図　北調査区北壁土層柱状模式図

第２節　遺構の分布

調査区の総面積は約280㎡を測る。今回の発掘調査で検出した主要な遺構は、竪穴住居跡７棟、配石４基、埋甕３基、柱列２基などである（第６図）。

当初はⅡ層（黒褐色遺物包含層）が遺構覆土であるという認識の元に、Ⅲ層（黄褐色地山層）の直上面を遺構確認面として調査を進めた。だが、調査の進捗につれ、Ⅱ層の包含する遺物の極めて多いこと、Ⅲ層を掘り込んだ排土によってそのまま埋め戻されている遺構が相当数存在すること、などの新事実を確認するに至って、遺構密度は平均８割から最大10割近くにまで高騰した。

結果として、大半の場合は目視による遺構確認が非常に困難となり、芋蔓式に遺構を掘削・検出して

行ったのが実状であった。また、調査区自体も非常に限定的で、ほとんどトレンチ調査の様相を呈しており、特に住居などの大型遺構については、その一部を僅かにかいま見た程度に過ぎない。また、他の遺構も遺存状況自体はおおむね良好ではあったが、遺構密度の高さゆえに、その大半について全体形状の明瞭な把握はほぼ不可能であった。したがって、本書における遺構についての記述は、その僅少な成果であるという事情をあらかじめ諒承されたい。

１～６区までの遺構は土坑・ピットが主で、密度も多少のばらつきがあるが、７区付近より遺構が爆発的に急増し、密度はほぼ10割に達する。遺構の内容も８～10区の柱列をはじめ、12～20区には竪穴住居跡７棟、配石３基、埋甕３基など主要な遺構のほぼ全てが集中し、その間隙を大小様々の土坑・ピットが完全に埋め尽くす。そして、19～20区の７号住居跡と配石４を最後に、遺構は急速に激減し、遺構密度も約２割程度にまで落ち込んでしまう。

遺構の内容から推察して、本遺跡が集落跡であることは明白であるが、さらに遺構の密集状況を考慮すれば、集落の中心部は７～20区、特に６棟の竪穴住居跡が集中する12～16区に限定出来よう。一方、１～６区および21～22区は集落の外縁部と思える。なお、今回の調査により、道路部分にもかつては埋蔵文化財が確実に存在したが、昭和13年の工事時に全て失われたこともあらためて確認した。

第３節　遺物の出土状況　〔図版第二（１）～（２）〕

本節では、縄文時代の遺物と遺物包含層の調査の概要について記述する。なお、ごく僅かながら律令期の遺物も出土しているが、内容は須恵器など数片に過ぎず、当該時期の遺構も無いので、これらについての記述は割愛する。

本遺跡の出土遺物は、縄文中期前葉から晩期前葉までの時期幅を有し、中期後葉の遺物を主体とする。包含層の遺物量自体が元々多い上に遺構密度も高かったので、遺物の出土量は調査面積に比して極めて多くなった。内訳は、土器が大型コンテナバットで約50箱、石器やその他の石類（住居の石組炉や配石に使われた石も含む）が約100箱である。

包含層遺物は、やはり遺構の集中する８～20区、中でも竪穴住居跡の密集する12～16区付近の遺物量が特に多く、反対に１～６区、21～22区の遺物量は少なかった。

また、包含層調査中に12～15区で集石（小礫の集中分布）を確認した。石はほとんどが丸い石で、大きさも様々だが、径10～20㎝前後のものが多かった。集石の状況は12～13区は礫も比較的まばらだが、14区付近で北西・南東方向に石が帯状に分布するのをきっかけとして、ほぼ全面に石が密集し始め、中には石組炉や埋甕の蓋石なども含まれる。集石は15区でほぼ途切れるが、16区はとりわけ大きく攪乱を被っているため、実際に15区までで途切れていたのか否かは判別出来なかった。

下層遺構との関連性を検証するに、まず12～13区の集石の空白部は、竪穴住居跡４棟（２～５号住居跡）の集中部にほぼ一致した。しかし、これら住居の覆土中にも小礫は多量に含まれていたため、この集石が地滑りなどの自然作用によるものか、あるいは作為によるものか、明確には判断しかねる。

一方、14～15区でも比較的大きめの土坑・ピットが連続するが、例えば墓壙に伴う立石のような遺構との因果関係も特に見出せなかった。